

農業活性化調査特別委員会 行政視察報告書

農業活性化調査特別委員長 石附 幸子

【視察日程】令和5年11月14日（火）～15日（水）

【視察委員】石附幸子委員長、保苅浩副委員長、佐藤幸雄委員、
佐藤正人委員、東村里恵子委員、内宮貞志委員、倉茂政樹委員、
野村紀子委員、松下和子委員、串田修平委員、高橋聡子委員、
野口光晃委員、幸田健太委員

【視察地】有限会社小原営農センター 富山市 有限会社土遊野
(富山県富山市)

【調査事項】有限会社小原営農センター（富山県富山市）：有機農業について 富山市：地場
もん屋運営事業について 有限会社土遊野（富山県富山市）：有畜複合循環型有
機農業について

○ 有限会社小原営農センターについて

1 有機農業に取り組むことにした経緯について

もともと有機栽培への取組はしていたとの事。営農組合からスタッフによる法人の営農へと変遷。2001年からの有機JAS認証に対応するため。

2 有機農業の実践によるメリット、デメリットについて

有機栽培の農産物、加工品はもともと大阪の業者との取引があり、現在も供給が追い付いていないが、現体制ではこれ以上の生産が困難との事。(栽培面積・人材)

JASへの出荷は要件が違ってもともと出荷はないとの事。

コメの収量的には慣行栽培の6割程度、販売単価はおおよそ2倍～2.5倍程度
人材確保においても、栽培スタイルというよりも矜持に共感した人たちが集まるようである。
スタッフも自発性、目標をもって参加されていた。

3 to y a m a GAP取得について

取得していない。今後も恐らくしないとの事。

4 肥料について

化学肥料も一部使用。



牛糞、鶏糞を使用。自作ぼかし肥料も使用。

(大豆かす、米ぬか、魚粉、かに殻、山の落ち葉などでのぼかし肥料、2月～製造)
種もみは温湯消毒。ちなみに育苗は露地プール。

5 今後の展望

継続していくこと。

6 所見

環境保全と有機栽培農業がとてもリンクしていた。慣行栽培より手間が掛かるが、自然志向や社会的意義を消費者が認識して価格転嫁を認めていた。が、地域による認知と理解がなければ取り組めないだろう。新潟市の農業への落とし込みには課題が残る。



○ 地場もん屋運営事業（富山市）について



1 事業概要

平成 20 年開業の農産物を中心とした直売所、市内商品のアンテナショップ。

中心商店街の空き店舗の 1 階部分に開業（上階は、まちづくり会社、専門学校、劇場など）富山市は全農産品に占める野菜の割合が非常に少ない。地場農産品の地産地消、中心市街地のにぎわい創出を期待した事業。年間 30 万人利用、年間売上げ約 3 億円。

2 取組までの経緯と現在の実績、運営方法について

・民間経営との違い

第三セクター まちづくり会社を設立している

・集荷拠点から直売所までの手数料などの仕組み

直売所に生産者が直接持ち込む場合は 20%、集荷拠点に持ち込む場合は 25%と、販売手数料に差をつけている。

・価格や規格、出荷量を生産者が決めることについて

地場もん屋は委託販売の手数料で運営されており、価格や規格、出荷量は各生産者が決めている。売れ残った分は翌日生産者が引き取る。何が、幾らで、幾つ売れたかは生産者が一目で理解できる。これにより、自然に価格、規格などで他の生産者との商品の差別化がされ、生産者間のすみ分けが自然に生まれ、多様な商品が店頭に並ぶようになっている。

3 生産者と運営主体と行政の3者の役割、協力体制について

販売者は直接、消費者の声を聞くことができる。その声を販売者から生産者に伝えている。生産者はより消費者を意識した商品を生産、出荷するようになった。



4 多様な品種の栽培方法について

- ・統一するのか、それぞれの農家の工夫に委ねるのか

各農家の工夫に委ねることにより、各農家の個性が活かされ、自然に多様な栽培方法が行われている。

5 「地場もん屋」という名前を付けることのメリットとデメリットについて

- ・食べ物以外の地域特産があるように思われぬか

合併前に「地場もん屋」という名前の地場農産品の直売所があった。それを引き継ぎ「地場もん屋総本店」とした。以前から親しまれている「地場もん屋」の名前が定着しているため名前でのデメリットはあまり感じていない。

6 今後の展望について

「地場もん屋」の中に「他所もん屋」という他の地域の特産品コーナーを設置した。ソムリエと呼ばれる食品の目利きが厳選した商品を加えた。生鮮だけでなく加工品も増やすことで、さらなる商品の充実を目指している。



7 所見

富山市はコンパクトシティを標榜し、路面電車 LRT やシェアサイクルの活用など行っている。「地場もん屋」事業も中心市街地への回帰を目指すコンパクトシティ政策の一翼を担っている。富山市郊外で生産された野菜等を中心部に集め、生産地と消費地の役割分担を明確にし、都市の無秩序な広がりを制限している。

郊外で生産された新鮮な野菜、加工品、目利きによって選別された商品は「地場もん」にも優れたものがある、シティプライド、シビックプライドの醸成に役立っているように思われる。

「路面電車と商店街は相性が良い」データは全くなく個人的な感想です。それでも路面電車が残っている都市の商店街は比較的健闘しているように思います。

個人の自由や利便性だけを優先するのではなく、弱者のために全体最適のために個人の自由を一部制限することを受け入れる素養があるからではないかと考えます。全く個人的な仮説です。

○ 有限会社土遊野（富山市）について



1 経緯

富山駅から南に 22 キロ、車で 30 分程の自然豊かな里山に有限会社「土遊野」（どゆうの）がある。1980 年代、除草剤を使用せずに里山の森林を守ろうと、杉の下草刈り要員を全国から募った「草刈り十字軍」運動で知り合った関東出身の橋本さん夫妻が、この地に定住した。

最初に手がけた富山市小羽の有機農業が軌道に乗ったのを機に、その地を譲り、より自給自足型の「有蓄複合循環型農業」を行おうと、さらに里山の奥深く、富山市土（ど）の 2 ヘクタールの山林で取組を始めた。

最初に手がけた富山市小羽の有機農業

2 有蓄複合型循環農業について

(1) 用水の確保と基盤整備

この土の地域は保水も良く、ギフチョウが生息する自然豊かな土地である。朝夕は涼しく米作りには適している。森を守るとは海を守り、漁業を守ることにもつながり、自然の営みは循環している。この地は田が耕せなくなると土地が転売され、すぐに廃棄物の捨場になるが、そうさせないようにと橋本さん夫妻は田を守ってきた。



稲作は水が命である。高低差が 220 メートルある上流の宮ノ越に水源があり、毎年 10 キロものずい道のいざらい（用水掃除）を行って水通を確保している。一枚 3 反の田の基盤整備は橋本夫妻が定住される以前から行われていたようだ。

(2) 稲作のアイガモ農法

特別栽培米のコシヒカリ、イセヒカリなどを作付けし、有機 J A S 認証を取っている。1 反から 6 俵ほど取れ、農協は通さずに通常の 2 倍の価格で販売している。苗は密集せず間を空けることにより、いもち病を防ぐことができる。



田植後すぐに、1 反に約 10 羽のアイガモを田に放つと、田をかき混ぜて雑草の繁茂を防ぎ、田に酸素を与えてくれる。また、アイガモはイネミズゾウムシなどの害虫を食べる。糞は肥料になるので追肥を行う必要がなくなる。40 ヘクタール（東京ドーム 8 杯分）の 140 枚の田を耕作しており、収量が低くなってきた田に順次アイガモを入れる。

アイガモは 250～300 羽ほど飼っており、卵を越冬させ、2 月～3 月にふ卵器に入れてふ化させ、4 月に田に入れる。アイガモの肉はレストランなどへ全て出荷する。



(3) 鶏の飼育

約 3,000 羽の鶏の飼育を行っている。刈り取った後の稲、ぬか、葉物や、パン屑などを餌に用いる。そこに土着菌を混ぜて発酵させアルカリ性になった物を与える。鶏舎は臭くない。輸入トウモロコシなどの飼料を用いないので、お金がかからない。抗生物質は使っていない。

一区画に雌を 80 羽ほどと雄を 1 羽ほど入れて飼っている

るので、卵は有精卵である。これをふ卵器でふ化させて、ひよこから育てている。卵は洗卵せずに汚れを拭くだけで、自然に殻が外部から細菌を守るのでサルモネラ菌も出ない。むしろ洗卵した方が早く腐敗する。一個 70 円ほどで富山農協に出荷している。

鶏は 2 年毎に雄 1 羽と雌 100 羽を入れ替え、近親相姦を防いでいる。また、工房を立ち上げ、売り物にならない割れた卵などを用いてプリンなどを作って販売している。



(4) 再生エネルギー

ソーラー発電で 1 時間 1 キロワットの小出力自家発電を行っており、エネルギーの自給自足を試みている。ガレージバッテリーを使用している。水車発電もあったが、現在は使用していない模様。

3 活動の展開と今後の取組

有機農業は憧れと現実とのギャップがあることが課題だが、子供たちを対象とした里山体験や有機農業の見学会、教育活動などにも力を入れている。

今後は森作りを中心に、キャンプ場やサウナ施設などを手がけていきたい。また将来の若者達と、自然や里山、水を守る取組をしていきたいという。

4 所見

初期投資に 3,000 万円を借入れ、有機農業を始めて 40 年余り。どんなにか御苦労された事だろう。しかし、橋本さんのお話からは、その御苦労を感じさせない自信と誇りが感じられた。

今後の展望を語る橋本さんは、チャレンジ精神が旺盛で遊び心があり、豊かさとは何かという事を考えさせられた視察であった。先達が開拓した日本の里山の豊かさも知ることができた。

有蓄複合型循環農業の全部はまねできなくても、その精神と手法を少しでも取り入れていくことが、里山の自然や人々の健康を守ることにつながり、このような農業を志す人も増えるのではないだろうか。

